

## アンナプルナ I 峰南壁登山報告 (8,000m峰 14座 完登)

山 本 篤 (明治大学山岳部炉辺会)

### 1. 前文

2003年5月16日午後2時40分、炉辺会(明治大学体育会山岳部OB会)にとって14座目の8,000m峰アンナプルナ I 峰は我々の足下にあった。これにより1956年(株)日本山岳会マナスル第三次登山隊に参加した大塚博美が初めて炉辺会員として8,000m峰に挑戦して以来、ほぼ半世紀を経て全14座の完登を果たすことができた。

### 2. 背景

1970年植村直己が日本人として初めてエベレストに登頂をしたのを皮切りに、82年三谷統一郎らによるダウラギリ I 峰登頂、83年中西紀夫によるナンガパルバット、85年山本宗彦によるブロードピーク登頂と続き我々にとって8,000m峰が身近なものとなった。その後もチョーオユー、エベレスト、シシャパンマ、マカルー、K2と会員による8,000m峰の登頂が続いた。しかしながら、それらは全て(株)日本山岳会やヒマラヤ協会、カトマンズ・クラブ隊など他隊に参加しての記録であり、明治大学独自の隊による8,000m峰への挑戦は81年エベレスト西稜に登山隊を送ったのみで、それも残り98mを残して断念という結果に終わっていた。

そもそも炉辺会員による8,000m峰14座完登は、初めから会の目標であったわけではなく、96年私が隊長としておこなった(株)日本山岳会青年部K2登山隊で14座の中で特に難関と思われるK2に登頂する事ができ、帰国後報告会で「このまま真摯に登山を続けていけば、会員でいつしか全14座を

登頂する日が来るのではないかと発言したことがいつの間にか炉辺会の一つの目標になったものである。

マカルー、K2の余勢を駆って我々は97年秋マナスルに登山隊を送った。結果、全隊員8名の登頂、明治大学独自の隊による8,000m峰初めての成功を果たすことができ、これを以って10座の登頂を数えるに至った。いよいよ炉辺会員による8,000m峰14座完登が現実味を帯びてきたわけである。

そこで残るガッシャーブルム I 峰、II 峰、ローツェ、アンナプルナ I 峰の四座の登頂を目指して2001年、明治大学創立120周年、山岳部創部80周年記念「ドリームプロジェクト」が立ち上がった。同年ガッシャーブルム I 峰、II 峰に若手のみの登山隊を送り、苦闘の末全員登頂、翌2002年ローツェも全員登頂を果たし、残るはアンナプルナ I 峰のみとなった。

アンナプルナ I 峰は1950年、フランス隊により初登頂された山で8,000m峰として初めてその頂上を人類に明け渡した山として知られている。しかしその後の記録によると登頂率(入山者数に対する登頂者の割合)は14座の中で最も低く、日本人にとっては登頂者よりも遭難者の方が多いという相性の悪い山である。現に我々も97年冬、マナスルの馴化を活かし3名で北面鎌ルートより頂上を目指したが、悪天候および隊員の体調不良により断念している。

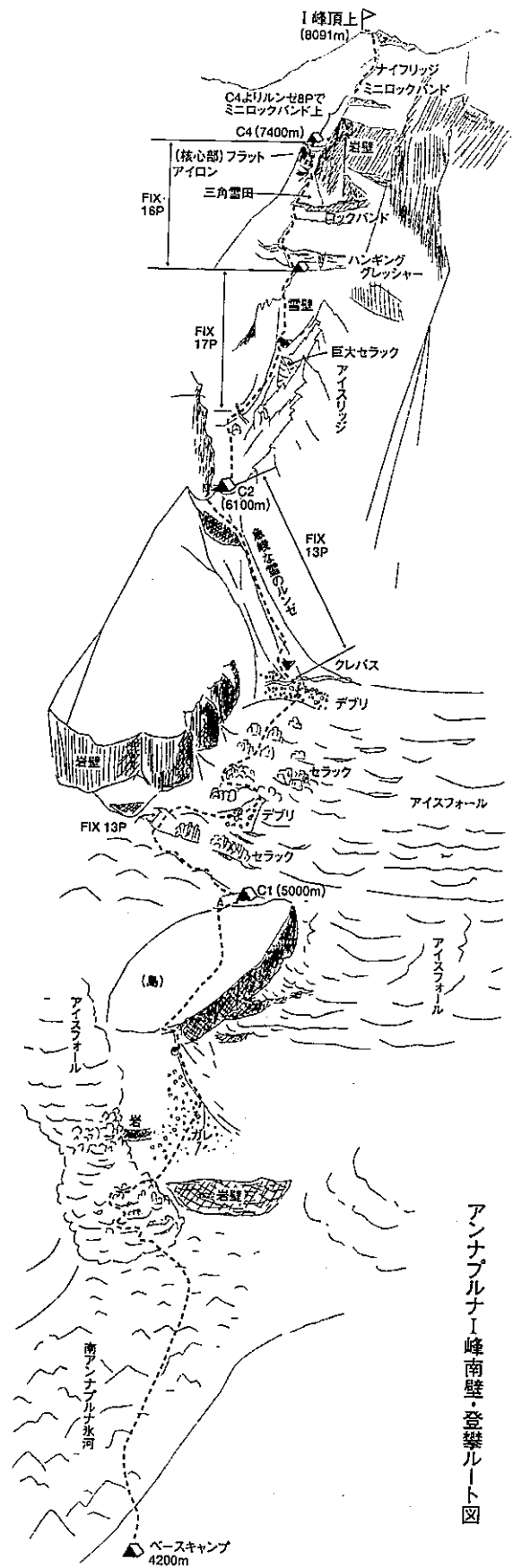
### 3. 計画立案

ルート選択について当初は北面が有力であったが、97年の経験より雪崩等の不確定要素による危険度が極めて高いことが確認された。そこで南壁を検討したところ可能性ありと考え、ローツェ成功後、高橋和弘を中心に2002年晩秋偵察隊を派遣した。約5,500m付近まで試登した結果、十分に登れるとの感触を得て帰国し、南壁の方が技術的に困難であっても致命的な大雪崩に遭遇する危険は少ないと思われた。その後の協議の結果隊員が確実に登り無事帰って来られる可能性は、むしろ南壁の方が高いとの結論に達し、ルートを南壁英国隊ルートに決定した。

隊員構成は私を除いてこの二、三年でガッシャーブルム、ローツェなど8,000m峰を登頂した者で固めることとなり、強力な布陣となった。登山方法はオーソドックスな極地法を採用し、前進キャンプは4つとした。酸素については緊急用のみの配備とし無酸素登頂、さらにシェルパのサポートもC3 (6,800m) までに留め、ルート工作においてはすべて日本人が行うこととした。また当然のことながらマナスル以来続いてきた全員登頂を前提に基本運行を立て、予備を含め最大60日の登山計画となった。

### 4. 実際の登山について

3月31日にベースキャンプにすべての隊員、隊荷が集結し、4月3日より上部への行動を開始した。このシーズンのネパール・ヒマラヤは極めて天候が悪く、約50日にわたる登山期間を通して一日中雪が降らなかったのはアタック日のみと悪天候に苦しめられた。エベレストなどでも各隊の記録を見ると軒並み予定を大幅に遅れて登頂しており、もし北面をルートとして採用していた場合、登頂する事はできなかったかもしれない。



アンナプルナI峰南壁・登攀ルート図

#### 4. 海外登山記録

実際の登山では、私を含めた8名の登攀要員を3つのチームに分け、また5人のシェルパを2つのチームに分けることにより、5チームが効率的に行動することができるよう努めた。登山開始当初は、比較的順調であったが、気温が上昇し始めた4月中旬以降より毎日決まっていた午後の降雪の激しさが増し、雪崩の危険の増大と共に動けない日が多くなり、次第に計画より進行が遅れた。それでも高橋和弘登攀隊長を中心に4月26日第3キャンプを経て7,150mまでのルート工作を終え、頂上への見通しをつけることができた。頂上までの関門は、この上に控える核心部フラット・アイロンと呼ばれる岩壁部分だけとなった。しかし同日午後よりの悪天のため、ベースキャンプ下降、10日間の停滞を余儀なくされた。

ほぼ2週間ぶり5月9日第2キャンプに再び到達した我々は、降り積もった雪のため全てが埋没してしまったキャンプ地で途方に暮れてしまった。今思えばこのことがこの登山最大の危機であったように思える。6,000mの高さで3m近くも埋まってしまったテント、集結した装備、食料その他を掘り出すのは大変な重労働で隊員シェルパ全員が丸2日間を要しなんとか態勢を立て直した。

その後12日、13日の2日間で核心部フラット・アイロンを突破、キャンプ4予定地に達し同時に荷揚げも完了したが、14日アタック隊員の一人である最年少の松本浩が肺水腫の疑いのため残念ながらベースキャンプへ下降した。

アタックについては、当初は2次にわたり全員が頂上に立つ計画であったが大窪・松本の離脱により6名となったこと、キャンプ4の滞在状況が極めて劣悪であることが分かり、無酸素ではまともな睡眠は取れずビバークに等しい状況になるであろうことから、隊を2つに分け力を分散するよ

りも一回のアタックに全力を集中する方が有利であると考え日本人6名一度のアタックに切り替えた。このことにより長くはもたないであろう天候に対処するといった面もあった。またアタックにシェルパを含めるか否かで悩んだが、彼らの国の山で登山をさせてもらっていることを考えると、彼らが望む限り参加させるべきとの考えでサーダーと相談した上、2名のシェルパをアタック隊員として採用した。ただシェルパはこのアタック・ステージまでキャンプ3に到達したのみであったため、いくら強いといっても無酸素での登頂はリスクが大きく、シェルパだけは第3キャンプより緊急用酸素を使用して我々を追いかけることとした。そして、これは我々の万が一の事態における保険ともなった。

テントの中で横になることができずひざをかかえ一夜を過ごした我々は、5月16日午前3時から順次狭いテント・スペースで一人ずつアイゼンを装着し、勇躍頂上へ向かった。前日のミニ・ロックバンド下約7,600m付近までのルート工作が功を奏し、早い時間に上部雪面へ出たが、このルート初登攀を果たした英国隊の記述に反しここから頂上岩壁までが非常に長く体力・時間を消耗した。頂上岩壁付近に3ピッチのルート工作を行い、主稜線に出たのが午後2時近く、それから数十分後頂上は我々の足下にあった。

全員登頂はならなかったが、日本人6名、シェルパ2名登頂という結果を残し、翌17日全員無事ベースキャンプに集結した。

#### 5. 成果および今後の展望

今回の登山成功の要因は、明治大学、炉辺会、そして多くの皆様がこの計画に多大なご理解、ご支援をしてくださったことで、我々隊員が登山に集中する環境を整えられたことが第一に挙げられ

る。また私はチームワークという言葉をやたらに使うことを好まないが、今登山隊は、各個人が役割を十分に認識した上でそれを確実にこなすことができ、チームとして本当によく機能したと思う。さらにチームとして何かを行う場合必ず必要な規律という面でも各自その必要性を理解しており、細かいことでうるさく言うことも余りなかった。一般に難度の高いルートに登る場合、とかく技術レベル、そして誰が強いかといった点に留意しがちだが、特に今回のような人間の弱さが垣間見られる長期の登山において、それは上記のような基礎的な部分を確立してからのことであると今回再認識するに至った。最大の危機であったキャンプ2の埋没にもめげず我々ががんばれたのは、あの気の遠くなるような現役時代の合宿のおかげであったと、今心からそう思っている。

極めて難しいと言われていたルートについては、1970年の英国隊がいかにその当時の超一流のメンバーであっても30年以上も前に登られたのだから、私個人はそんなに厳しいとは予想していなかった。しかし今冷静に考えると技術的に難しいところも多々あり、何よりルート・ファインディングの面で、我々は過去の隊の残置物を目安に迷うことはなかったが、最初にこの複雑なルートを見いだすには多くの経験、優れた感性が不可欠であったと思われる。改めて初登攀の英国隊に敬意を覚えるところである。

今回の成功により、炉辺会は8000メートル峰全14座に登頂することができ、その活動に一つの区切りを付けることができた。「個人で全座完登し得る時代に複数の人間で行った記録など意味がない」、また「百名山に登るのに等しい発想だ」との心無い評価も耳にするが、この結果は約半世紀の間真摯に登山を追及していく姿勢が一クラブ

の中で継承されてきた証であると考えている。さらにこの炉辺会員による8,000m峰14座への挑戦の中で登頂できなかった登山を含め一人の遭難者も出なかったことが実は我々の最も自負するところである。

次は何を目標にするのかをよく外部の方から尋ねられるが、しかし登山はその精神性、果てしないフィールドにより無限の可能性を秘めた行為である。今後は自由な発想のもとに各自が意欲的な山登りを展開していくことを期待している。

最後に、この登山を支援して下さった全ての方々、その豊富な経験から撮影のみならず多くの恩恵を登山隊に与えて下さった中村進さん、我々の心の拠りどころであった志賀ドクター、隊員たちを温かく見守りながらベースキャンプで総務部長さながらに多くの実務をしていただいた平野総隊長、そしてつたない隊長であった私に最後まで不平不満も言わず、登山成功のため全身全霊を傾けてくれた高橋登攀隊長以下の全隊員に心から感謝している次第である。

## 6. 登山概要

隊名：明治大学アンナプルナI峰登山隊2003

総隊長：平野眞市 (65)

隊長：山本 篤 (40)

登攀隊長：高橋和弘 (29)

登攀隊員：大窪三恵 (30)、早川 敦 (29)、

森 章一 (28)、加藤慶信 (27)、

天野和明 (26)、松本 浩 (22)

医師：志賀尚子 (37)

撮影・記録：中村 進 (58)

日程：

3月29日 ベースキャンプ建設

4月3日 登山開始、C1 (5,000m)到達

4月6日 C1建設

#### 4. 海外登山記録

4月13日	C2 (6,100m)建設	5月15日	C4 入り, 7,600mまでルート工作
4月18日	C3 (6,800m)到達	5月16日	午後2時40分登頂 (山本, 高橋, 早川, 森, 加藤, 天野, シェルパ2名) →C3 下降 (シェルパはC3よりアタックの後C2まで下降)
4月25日	C3 建設, 6,950mまでルート工作	5月17日	BC帰着
4月26日	核心部「フラット・アイロン」下 7,150mまでルート工作	5月20日	BC撤収
4月27日	悪天のため全隊員BC下降		
5月11日	半月ぶりにC3 入り		
5月13日	「フラット・アイロン」を突破し C4(7,400m)到達		

#### 炉辺会8,000m峰登頂者一覧

	山名	標高	ルート	登頂月日	登頂者	備考
1	エベレスト	8,848m	南東稜 北稜 東南稜	1970年5月11日 1988年5月5日 1989年10月13日	植村 直己 山本 宗彦 三谷 統一郎 大西 宏 山本 篤	日本人初登頂
2	K2	8,611m	南南東リブ	1996年8月14日	山本 篤 高橋 和弘	最年少登頂
3	カンチェンジュンガ	8,586m	南峰より縦走	1984年5月20日	三谷 統一郎	
4	ローツェ	8,516m	西壁	2002年10月3日 2002年10月8日	高橋 和弘 森 章一 加藤 慶信 三谷 統一郎 天野 和明 松本 浩	無酸素 山岳部4年次
5	マカルー	8,463m	北西稜 東稜 〃	1990年5月6日 1995年5月21日 1995年5月22日	大西 宏 山本 篤 山本 宗彦	東稜初登攀 〃
6	チョーオユー	8,201m	西北西稜	1985年10月3日 1988年11月6日 2002年10月1日	三谷 統一郎 中西 紀夫 北村 貢 山本 篤 大窪 三恵	日本人初登頂 〃 〃 シシヤパンマと連続 登頂 明大女性初 8,000m

7	ダウラギリ	8,167m	北東稜	1982年10月17日	田中 淳一 三谷 統一郎	
8	マナスル	8,163m	北東稜	1997年10月8日 1997年10月9日	三谷 統一郎 山本 篤 高橋 和弘 豊嶋 匡明 加藤 慶信 広瀬 学 原田 暁之 関 裕一	山岳部4年次 山岳部4年次
9	ナンガパルバット	8,125m	西壁	1983年7月30日	中西 紀夫	日本人初登頂
10	アンナプルナI峰	8,091m	南壁	2003年5月16日	山本 篤 高橋 和弘 早川 敦 森 章一 加藤 慶信 天野 和明	
11	ガンシャールブルムI峰	8,068m	ジャパニーズ・ クローアール	2001年8月13日	高橋 和弘 早川 敦 森 章一 加藤 慶信 天野 和明 谷山 宏典	ガンシャールブルムII 峰と連続登頂
12	ブロードピーク	8,047m	西稜	1985年8月12日	山本 宗彦	
13	ガンシャールブルムII峰	8,035m	南西稜	2001年7月10日	高橋 和弘 早川 敦 森 章一 加藤 慶信 天野 和明 谷山 宏典	ガンシャールブルムI 峰と連続登頂
14	シシヤパンマ	8,027m	北東稜	1988年10月24日	山本 篤	チョーオユーと連続 登頂